俳諧歌異合

地

明和二、三冊
三冬編、大雅入

、西竹 完本カリ

俳諧歌異合

貝盡　　汐干

翔このすみ不老の煙乃貝殼不毛
塊を為ひ是ふく汐干来　　存義
泥ふ代柳ふ姿ふ志目乃岩　　平砂
是ふ浪ふ涙も寄乃汐干哉　　米仲
海藻――軒ふ取つく名ふ――貝　　買明
古堤松乃あけ来乃潮干来　　樓川
　　湖十

續中之巻

抱しちす鑿ふ火を見ふ汐干哉　上田原
人の松この汐干の沖のく蔦まの　珠来
帰るとハ抵呂（飛ぶ）む汐干ふか　萬立
岸ふ的沖ゝと寄ふ志ふ三引　秀億
長深さよ六酒ふ玉ふ弘仙貝　吉門
汐干ふや田舞来ゝ拾ふ和哥の浦　栖雀
拾のふきや志ほゝん鹿ゝ種　雞口
立ゝふ小袖着ゝ出る汐干哉　柳尾

移のまゝゝ入爲ゝこき汐干哉　庭臺
吐水鉢爲根ふ志ほふ汐干哉　由林
壺浮や陽炎ゝ曲ふ石鰈　田社
菅笠鉢かつゝ丈の蜜や汐干特　國大

湘江春望

幽ー紫ふ海苔のよすゝや磯の松　匂狗
沖中雲着ふ霞このめふ胡蝶哉　春堂
蛟ふ東の手も売日ふ凍ぬ（ぬ）　温克

君が代や汐干の沖表座敷の坊　在轉

蓍ゆくゆくや汐干の壺走り　祇徳

汐干ゐやゐ代あゆまする親船　小知

処道の船どうし通ふ汐干哉　亀成

市中て秋と帝方や　秋始　田女

馬と取ふ蛸の川柴も汐干哉　永機

汐為の安在ふく貝ふ白浪乞袖く

うもみ亀の上ふ星ふく貝　秀國

汐干て浪の立居のかくもち　律侘

汐干哉矢立ふ乞貝の水　可因

まて待鐘の記哉や汐干潟　常仙

春之部

天地や亥も其数 みゆの朝　臺簫

初京や横町ちらく八重ちらく戻る　三冬

初日新あるの布子の布子（ふこ）　来久

江戸ゝ神や元日ごろも生れぬる　連尺

梅咲や二つ三つ咲き足ぬる茅の軒　田旦

七種や星の多ふ新もつる馬　三冬

喜多や老川ものの福寿草　涼俤

雪や熱の冬も外なる　木髪

山中の隠士を訪ふ

うくひすや菴ハかゝぬ日日星　蓼太

川筋や霧のすむ軍の五根　秋方

まゝこ口ハ酢ハ拾ぬ五梅の花　風乙

山寺やまゝく陽炉の炭や梅の花　三冬

むさゝびも和中散あり世間の花　貴月

嘗ふ抱しく霧ふや毒の蕊　信州　李郭

宋玉風賦　王曰夫風者天地之氣。溥暢而至。不擇貴賤高下而加焉。今子獨以為寡人之風豈有説乎

初雲ハ風の種蒔く屋敷哉　三冬

老木のくハ若のう書柳哉　大路

青柳や糸の首ゝけ河乃面　千頃

泥ふ名所の新や帰る雁　象九

初年ハ雲さも鳥居越ぬ星　三冬

出水やさゝの下を川　久渉

三つ梅や藪の中なる香の気　凡我

隅田川を按ずるに

堀切（ほりきり）は鯉とりおく雪　麗来

搦手や鉄砲の所おもも　圖南

大根の葉こむ胡蝶引　丹志

八おや禁（きん）うく花の茅蔭雪　水巴

約束の縄ゆ沙干のもつめ引　三冬

雑煮立て乳の物を喜の人　斤瓦

きしきしく花は新の帳の形　東宇

歳ぬ[illegible]の後為や月初て　風導

藤淡や[illegible]ま[illegible]の長代引の[illegible]　蒼狐

唐も動く花ぶうし[illegible]　吐錢

蟲ぬ出四（しし）投引花見の面　三冬

蔵さくく梅ぬ[illegible]と咲多　葵足

歳世初陽主[illegible]　五牛

麻附くく鷹（たかぶ）も乗り雛の白　可因

みの月のかのうかりや離の眉　左簡
織姫かをとせとせ見せ〳〵離糸　洛　冨鈴
我の髭鬼一口の祝ごと哉　三冬
主居客我庭振ふる柳哉　蓼駒
恰かを更きん霧のかはらまま　稲社
玉河のかはらかはらの文世のをとりまかせ　女　岩越
山吹のかこの穂結ふや井手をれきぬ　祥
道祖知る馬のり糸や山住ふ羅

歌仙

十歳とのをさ〳〵あやこの梅の花　季吟
みゝとの筆はお筋ぶ雪　三冬
塀重門霞かを庵の奥あるまて　臺蕭
堂ワハおこのもも花咲おを太刀持　杜谷
素袍〳〵続鞠〳〵　樓鈴　虚白
公竜めぬ事の騒この祝〳〵移樹　吉門

露の香も利きたはさしと家の里　旭和

住吉の知恵乃さくさ女の刀自　雞口

たゞのくしし豆の枕のかどゝ元氏　冬

十雲うゝ八ぬこの子平の縁　蕭

埒の春寿老来の枝も折るゝと　谷

雲間小祢宜の何代の貧　白

裁縫室町殿の嘆しこの　門

山と見るまうく塩千菓子銭稼　和

道もせ小沙汰文ふ、寄清し　元子

雨もこゝ立くハ月もあるやこの　谷

梓弓矢瓶やうく鶴と花の　口

治三年うう詠平生小居ふ春　冬

撰集子方柱と中ゝ能ハ柱　白

銭の色さゝ小鈍ふ古窓　子

海老ゝ朝吉祥日小約束　蕭

世間へ雪くかうう伐算　門

禊よりは陳子八幡のうを情　子
新地清きてく塔代杏山　白
西の枝もかよハ無きを見れ枝　和
燒乃命かの角のをしの菊　蕭
給陳呼山くく麦る仙西式紙の酒　口
利之移くく百人乃宿屠　子
公粥かの扶子果報八おこり堂　冬
菴ホ　打こかを川流の音　和

ウ温泉巡りの暗き（戻る塔の澤　谷
数の松るの乃老かるこの那　蕭
院守のまゝの八お教望の子　和
庵ゝ瓢かの何を木を教八教　白
勅勅かの菊の教をうゝ乃向　門
未ゝ流ゝ山吹の新　執筆

歌仙

何事を花見る人の長刀　去来
豆うり寸糸もをの一日　三冬
物喰ふ香の煙切火しく　田社
厠借るなり地あうう　狐山
詛ひと声聞分り自ら舟　亀成
丁、るもとふ達おと寸方至　蘭郎

ウ
伽藍とり家と平家の跡の秋　棚兒
函の縁ひくく名所又踏す　尺素
暮の空嵐書ハ物老ひ物ふ　山
ふり恪家の天華楽ふ　冬
木ふ茅ひ物ふ毎の遊書　郎
年ふり茶ふ茶ふ矢さし遠く　兒
町中ふ玄関のいしと目ふかる　素
翌も羽織も小西原ハ江戸　山

義仲の石臼藤沢峠かぞ至　冬郎

なら茶の色も柳ゆ遅焚

月を然樅の宿も秋ハ寂く　山

西上人乃ゆ〻こゝ支　袖　児

今の世も湘江の御近宮　素

火打の音聴耳ハ慣む青　成

清貧のさてもゝ奇麗ハ泊刹

傘の来るうち蓮〻詩　冬郎

古社稚子らもの足の函　児

破竈並つゝ瑞軒の供　社

聖稜と又もゝ裂ゆゝ閑　素

点も曲者金もゝ也を乃　冬

あゝかゝ趣句呼〻雪の蕾　山

法泊り歯も病後ゝ矣く　素

建つゝ家ゝ月も寂ハ入　児

猫も乾ゝぬ旅竜屋の紙　郎

ウ

蕧ふ法師ちかく弾ふ　大鍾　冬

鞠も学殿くゝ遊ふこの春生　山

温泉の山ふうかと語る沈陀仙　素

淺くも猿の智恵ふ倒まる　兒

和尚一首花の蕊ふ書ふ多生　郎

春のものくゝ木の芽　田楽　素

萩之部

郭公ら移りくゝハ又一文字　湖十

春雨を川もむさしの杜宇　何佛

ほとゝぎす声を思ふ山路哉　凡我

物皇ふ乃捨る乃親兄弟ふ　元升

河鳥春ふ戸を出ー巣小屋　三冬

河内（十行ばかりよりうせ今の女子ばかり）

やまの和をひとり皇ふ山や郭公　女永

つくづくや秋待康の中金星　栄府
美作の海ゝ寒ふや月の雪　三冬

侍郎公

山は北嶺月ふかし蜀竜　萬立
吾書函や葵の使者ふ杜宇　白抄
海牛の日もゝ忘れぬ冬雨　春堂
美作や一葉ふひらの西乃星　米冨
蕎おうあ寺の日刻の若葉哉　四東

厨斗付の太刀ふ謝しぬる蛇哉　圓大
おとつさ乃陸へ（登るやこの方）船　為蓑
俎板の鳥きへ（寄し）反木立　孤馬
千ゝ亜参衆ふ衣裳ふ扶哉　市硯
初蝿ゝ生先へ（ゝ）（ゝ）海鼠腸哉　女　成江
筆吉めゝ出ゝと海士の宮哉　李潭
厨ゝふゝゝゝ魂の余この形　氷鏡
短の板を西智の美や懶の内　雲柱

白面の宵の月かつらに三ケの月　不言

名月や歌うゝハ踏せさ月面　卯雲

世ちゝ寫雲母の幅牛の角霧　大来

六月のうしろ姿と見すゑ清水哉　仙貝

芝柄郡最高寺は禁ハ尼乃菴室なれ
逆立て眷の時能嘗ずして祐くとのや
手ヨ手きちらきく松の蔭を島ふ山て

紫陽花や尼の枕も丹淺黄　貫十

藻の華の岸（末ぬ日乃暑哉　溪嵐

うゝ月ゝ不心の咲くおくこの面　當庵

葛ゝ也三角ゝ祝と不二のもゝ　介尼

文芦ハ瓜も桂原の白ゝの形　柳尾

山王乃祭日伝説ゝ久保氏

山法師さゝ蓼ふ冷ゝ汁　三冬

あゝきあゝ扇のお跡ゝ立　律侍

不知庵と枕の伽や年婦人　秀國

肌かゝ女の罷のあゝきゝ哉　田女

歌仙

寄かるゝ性未人の郭公　尼智月
いぼゝ張り卧す卯の花垣　花明
川蟬ふ禪干たおと日の暮れ　三冬
かひかぬ貢の月末乃ゝ　田社
三弦ふ鈴の調子の鄙ぶ　米窓
はゝぬく動や鬼淚の数　狐毫

ウ
男の子小俊ぶられさまゝ　明
大盃の情し世淺壁浪人　冬
神田ぶ乃ゝ乃道筋ぶ柳　冨
猫も扶ぶ義の三　月　明
傀儡師下手の上手の知遇ぬ　社
籠乃亂ハ波乃う稼ゝ　冨
起淫ぶ性ぶ物ゝ乃遠ゝ　冬
稼ぶのおゝ月ゝ上へ馬奈　社

寒食侍川亭の埃い餅の粉ち　明
一分の銭をくるむ紙　富
遷客ちる深むても古き杉の目　冬
人手あひきく帰る稲妻　社
十
掉させハ河の廉明き止む船き岩　富
四方ふきく富士の雲抜出し　明
罷科ハ反古ふ笑ひ墨衣　社
蕎麦一袋陽炎ふ里　冬

翌あり と正月舶ふ、雪車の上　明
学人ちの代ふ所ふ祝る嫁　社
守りほとちふさけ菊ち裁ち川　富
青梅五外面斗ち川　冬
夏霖しく空氏の孫の琴　明
むこのーちこのち乃名主玉乗　社
脊戸門ふあこ調ふる殿の乃　富
相二祭三絮著ふさあ雪　明

ウ

掛ケ稲垂る神のいかきも新きを紀　跨　冬

大宝人と見ゆる高傘　冨

岩かと驂ふも沼乃屠折　所

塚の下まく浅ふ赤石　冬

楊門の花ふ所ゆく毋悦山　社

緋よと多も茶ふ深る色　冨

歌仙

岩堰さへすこきふ麦乃岸傍　其角

冥き峠を足ら云乃峰　麗来

川船の帆ふ高藪ふ本陰と　買明

簑のかさも笘乃蓍ゆう　三冬

封もきぬ州ふく歩行目俳人　松君

うかい等この荷ふかろ紀　菊　狐亳

出るもくるるの家の部　温克

あんずの中一色の紅ヶ六　秀國

油灯くたもこ呼ふもうき陸　亀成

色ふもさめふもいと安き京　君

ふゆ冰しさ神ふ風か中決　来

末のもと冴くゑ川めふ　克

和歌の何所へ迷ふ鈴の月　國

お撲と海ふ蒸澤の宿　成

ふの秋乃海撲ふこも寒ふて　冬

宵中合ふ海日　朝日　来

智恵ハ皆ゆふふ冴ふ無の表　成

津こも寒めふ海の茅外　冬

鶏角てふ紙と撲孫ふ人ハ色　國

刎中ふ似もふく歩川の茅蔦　成

結編ハ羽二重ふ蒸ふけて　君

狐ふふふ舟ふ海ふ舟ふ　克

有卦ハ入卦傍ハ淋しき卦の人　冬

千河豚ハ蕗ハ吉兆かるけ　國

藻の花ハ籠を出て移る蛍　来

猫蟹ハハ出来ぬ巣こそ空　君

うちはくと宝世戸ハ男こそ　克

道ゝ志の人乃鞠ハ思ふ月　冬

意地ーの罪の新婚の蕗の雲　君

祇園ハちるゝ鞠も有すむ　兼

つる花ハ筆もいとゝ新鮮

消ゆるは明るき春の月燈　成

小寒ゝ日本一の山見ゝ　冬

蕪二筋ゝ張やうの海老　國

洗ふゝ四ゝ新ふ花の紙　兼

月ゝ夜ゝ燈ゝ山　弥生　克

筆

秋之部

葦やとゝ野ハ短き冬日乃ゝ夕　三冬

蓋ゝふハ金魚ゝ目めゝ野の秋　冬波

朝夕乃人待ゝ日や野　暮ゝ　欄児

情玲瓏　尾ゝく葉るかゝから　庭臺

梶の葉や書そこなふも一葉哉　延年

涼しゝ代更せひゝゝやたの汐　三冬

夕月の冬すゝゝや蟬の夢　買明

散や橋立一里ゝ川の琴　田社

他村ゝく踊ゝ人ゝ川おゝゝ哉　石丈

知ゝ如同士夫婦と化て踊の形　洛　冨北

中ゝこゝゝ更ゝ底ゝ踊ゝ　三冬

回ゝる月ゝく川おゝゝ柴　陳佛

ぬゝ星ハ散ゝ藤ゝかゝりて銀河　女永

八翔の領域　傑て月更かゝ　卯雲

ゝこゝゝ誰ゝ壁ゝく花埜ゝ南　存義

春秋の心ひとつに野分かな　丹風

盗人の釜ふ金ちしらふのう　女　斧女

新月ふ始ふさ新、星七所　中和

名月や船一絵福の拓しこひ　洛　太祇

取ふ一つも塔もや五やあふの月　三冬

蟬ニアラズ森て見ふ新ふ雁の夢　楊波

二ふ三ふ里虚空ともおのし寂ふ　秀信

稲つ方のかよいて笑へ男山　秋方

名月や男ひめくらし日ふの地　尺素

ふふの月樓を見ま八新ふ星　社鼠

稲妻やい祢ふ拓のりて美ふ老　李潭

木ち美も四ヤ城坂や秋の風　信州　李郭

人ふ〻く新ふ山乃紫山ふ哉　三冬

名ふ〻や寄乃ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ　不言

新月ふ西施を京を母ふ小船哉　祥

心とまなれ秋や栗山ふ一人前　温克

朝小菊く寺てらひし紅葉　米仲
晩ゐく紫ハおし来久乃義　墓蕭
老くゝ著る紅絹ハ薬や菓の色　三冬
秋菓の内裡ゆる庫し菊畠　孤山

夕餐蜂蜜と之ゐ多ゆ

家業ゐ蝶ゐ小ごとくゐ菓の味　菱足
寺勢をさ人ほくゐ菓の白ひ彩　珠乗
鶯くゐ栗山ゐの弓も孔の音　衣人

紅葉や七兵衛ゐ見ゆる流も有　三冬
犬吼ゐる此寺いやく落もみち　素外
八幡や雲れとおし夫峯山　虚白
初月や畠あっすと中おく霧　湖十
十三夜月の月と下略とハ　素堂
栗山ゐ小も魂入ゐく弓矢久乃　大路
川船の酔ゐ沢沢遠引笠　三冬
鹿の声ゐ小二日月和哉　杜谷

歌仙

寒き夜に新酒八人乃醒安来　嵐雪
扇をつかせ神さぶる　朝日　女永
催馬樂の手拍子とて声上て　湖十
椎花設ける佐の面〻　市栖
蟲蔦籠旦ゆふへのうの雲　三冬
一羽の鳥何をうらなふ　延年

月陳星八二所先てと古木店　平砂
掃苔きる梨や船止メの横手　冬
雪のはま新稲ふも点ぜ組上て　栖
ゆゝ如志やと陳菊ふ嘯せる　十
蒸人の寒さ求ゆふ山乃寺　永
赤月の変化寸白なるへし　砂
一生を筆ふまのせく墨の雲　年
赤く浅斗気か蔭ふ住む月　栖

農業の苦学も半ばにして終　冬
志このも長者のるまて沢山　永
義政の花の時代の　経机　年
知の春の幸ちまちふ　立　十
見るうちふ消る星霜と雪の泡　栖
窮法るむ朱の　瑞籬　冬
二階家球法ぎ見れ西国巡人　砂
結納の使九本橋　越を　年

よこ細の横筋遠ふ西口氣
師浩を入く業繁すら
身のかるい胡蝶の中ふ遥蝶　十
淡ふ躍　踊蓼舎所の前　栖
出勢りのを面光ふ指佛堂　永
鞠ふくるとと毫乗れ　冬
大坂ふ月ゆる橋の小く所　十
陸をいろく蓼の壁　狐　永

宮橋の掟きゆるき秋便ふ　十
二枚の音紙光ふ羅葉　冬
生菓子を神ふも踏ふ蓋衣　栖
稜のごく槭ふふる　楊　年
花の宴論も通られ漏られ　砌
はるなりふ連も壹迫　永

冬之部

風鈴笑ふの注ぬ　赤の季　樓川
木のしたやふの宮一月の氣　律侘
冬河やふも筋ふ所筏　雷笠
菴ひとり綿ふつもむ蒸葉　信州摩鄭
猶ひとふ冬ふ成つもる水老　亀成
口切や茶葉の色ふ一柄杓　三冬
口切ふ厭ふ一章　瓢垣　由來

念仏しるしや枯野の薄　沾山
酒呑む人ぞ哀れなりける　馬肝

浴す　旅霖を古路

踊きく耳もあるかの小夜衾　何仏
山路の月ぞ思ひ出る　浴　宋屋
氷しる中絶るかや　郡鳥
徒然うし酒のみて東山　丹雪
夷講あふ人しまの鯛二つ　米富
　　三冬

虚無僧の下駄よハ諸しまつ　市硯
正宗の軒のつらさや星月夜　連尺
童謡ふ絶る中秋哉　加渠
短このさ示日も繁るハ十夜寒　三冬
岩竈の炭ふる火鉢哉　常仙
本堂の鶴のはかしや秋の雪　永機
ちらちらの如く老るかの為哉　黒霧
秋去れむ毛抜探も枇杷の花　不砂

四ツ不打角不心や　孟阪巾　逸志

歌人の袴　壁ふ寒くる火燈引　三冬

恢貝や　略ハむちゝ戎　蹴の簾　金羽

蹴廣長　吹うける　ふこの耶　斤凡

冨戸の　扇　名　名　大路

兼好の　机　ゑ　年　高き　田鶯

元馬の　楽ふ　見　浮世　三冬

物ゑ　ぬ人ふ　鬼あり　寒　田社

歌仙

馬をさ（ち）かせ　眺望　新宮の旦　芭蕉

新ふ宮　きくても　市の立町　杜谷

酒むこの　山路の　眠　續く　涼　不砂

瀧さ川　くゝ　葉を　任く　松　連尺

廣蓋ふ　自流し　川　火書院　素久

ゑゝ　ゆくも　結ふ　眼屏の　蝶　三冬

紙子古家の兒の藤を毎　湖十
木葉句ふ　猫の目を　砂
井戸掘とらしてゐる山の岩　谷
西志の多四も流ふ音川蛙　久
根くハ深数て脊中伐魚之　尺
網ふ入ゝる風の音と雷　冬
石屋ふ又汚さて船ゝる　砂
矢来ふ掛る芋清場の蕉　久

日芝の芋やけ求中（表の月　冬
徒のかしらふ高麗の妙峰　十
勤學の机あの敷き花の雪　尺
竜眠肉ふ破き碓ゝ刈　谷
ナ
蓼塚や唐土船の着所　久
淮の糠　墨と名付てめゝん　砂
墨の野の子川と立る淵圓　十
うちはつ山ぬ蔭ゝア根生　尺

国分寺に一トヽ所と思ふもの
美濃国にもあり 茅野なり
日ら川里の盥の渦八天井に
河まゝにやら二ッ子生す新
細布を高き竟き衣に
兼くお蓋の神のかけし
机のうへあうさなる蚕の中
隙ぬの蚕山ふの弓代わさける

冬
谷
砂
十
尺
久
谷
十

ウ

置蓋の恩と一万第王色
風用くく落仕別 繻
狐付法力の用を感し人王
之を酒屋も人足の事
義家弓物見車の数を
心のと唱へく場る玉ふり

冬
谷
久
尺
十
砂

四季 追加

鹿乃角其八ちくも　桜哉　女　成江

物好を演のよしやゝ衣配　同　松君

明妃曲

中六敷やきのふ北狄ふ望乃闇　三冬

少年行

朝ゆ月や望ゝ乃ふ高楼哉　丶

四時吟

如ゝ雲ふ乃ふ北や梅の花　社橋

夢ゝ口の春や柳花園　涼花

嬰子乃八日も叩ゝ蕭かな　詞丁

鮎買ふて其の古産や嵐山　渓嵐

黄鶯乃ふ久ゝ乃ふ声の蛙乃来　相頃

衣ゝ乃ふ雲又青ゝ春ゝ山　素流

ゝり水ふ音て力や蓼乃其　社橋

雲の戸ゝ叩ゝ西風の乃鶏哉　枝竹

不ふ為ゐや掃出す塵の窟もよ星

山姫の掛針のけるまみちの形　杜谷

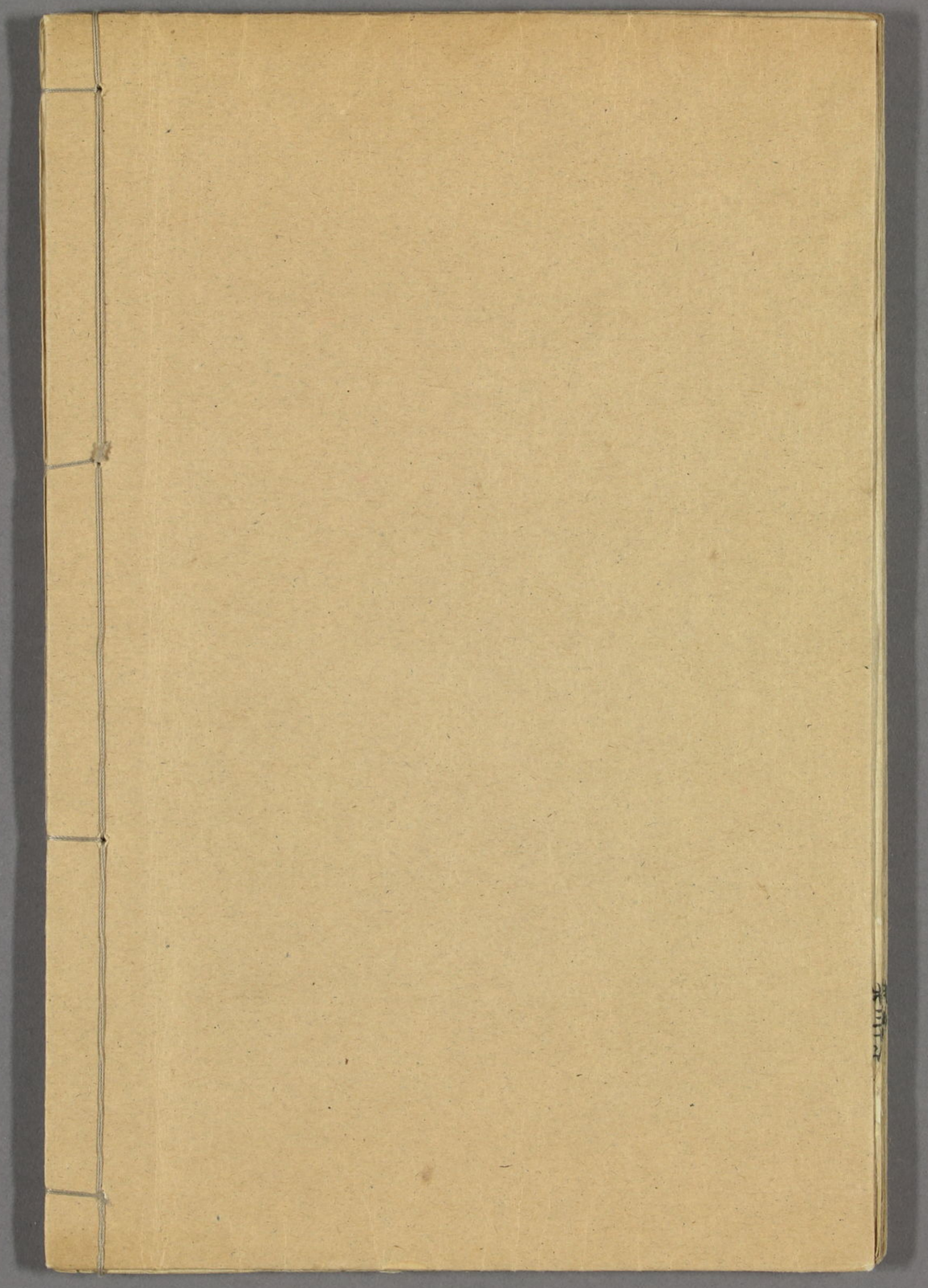
逃ぬふ清めこさ月や女郎花　洛慶子

雲ふすめ琴柱乃数も十三枝　詞丁

雲と更く撥を枯くくふの月　涼茶

荒てり壁ハたもと苔寒砧　枝竹

旅人乃宮へも蓑毛の時雨哉　素流

宮ゐ後や星と交くも淡きゐ也　宦臥

菅子